

2018年
3月24日

国際総研ウィークリー 第355号

組織破壊攻撃に松崎明さんはどう臨んだか

動労東京地本講演会（1970年12月）講演より

国鉄では1970年に「マル生」と呼ばれた労働組合破壊攻撃が開始された。その中で、動労東京地本書記長だった松崎さんは、東京地本各支部の役員・活動家・青年部を集めた講演会で、マル生攻撃にどう立ち向かうべきかを力強く訴えている。マル生粉碎闘争を勝利に導いた闘いの端緒となった講演から、最後の部分を抜粋して紹介する。なお講演の全文は4月15日発行予定の『われらのインター88号』に掲載する予定。

組織攻撃には断固対決

動労東京の現状について最後に簡単に触れておきます。このあいだの支部代表者会議で私は言ったのですが、国労においても動労の他の地方本部においても暴力的な分裂策動がやられている。「闘えば分裂する」と言ったある地方本部の委員長がいますが、この人は安保闘争を決める際の全国代表者会議で、「安保闘争を決めただけでゾロゾロ脱退してしまう」と泣きごとを言っていたわけです。しかしわれわれ東京地本が闘ってきた安保闘争の現実はどうだったのか。全国的には大きな分裂の波にさらされているけれど、東京では今のところそうした動向はないのであります。

動労東京地本においては「生運研」運動などを通じて当局側の思想攻撃を十分徹底させて、来年一挙に組織破壊に出てくると思います。敵の目標はほぼそこに定められたと私は思っています。この間の出来事はそうした必然性を示唆していると思うのです。国労東京地本では、つい先だっても隅田川で60名脱退した。動労東京地本のみ発生しない。横浜で佐藤さんという人が鉄労に行ったけれど、この人は支部の公金を使い込んで、鉄労から金を借りて返済した。そのことによって鉄労に行ったのが事実であります。飯田町支部の鈴木という人は第一種官舎に入っていて、乗務が十分

できない、頭にきたと言って脱退をしているのであります。資本の攻撃としてはチャチなのであります。つまり、意図的な資本の攻撃というより、どうしようもない奴のやっていることであって、脱退の質が違うのです。

今後、生産性向上運動のグループを広範につくり出し、それを基礎に動労東京地本執行部に敵対する反対派作りを猛然と広範囲にやってくるでしょう。そして来年三月の春闘なり、あるいは八月の全国大会を前後する時期に一挙に脱退が出てくるのではないかと。その可能性はきわめて高いと見たほうが良いと思います。この動きに無原則的に右翼的に妥協するつもりは一切ありません。必要な戦術的妥協は労働組合ですから当然ありますが…。

大きい人も、小さい人もいるのです。先程も言ったように考え方も色々ある。だから当面する具体的利益をいかに実現するかが、さしあたり労働組合の任務であります。そのことを否定して、賃金制度の廃絶を直接無媒介的に労働組合の任務にするつもりは、私たちにはありません。しかしながら当局の代弁者として右翼的な反対派作りがやられ、それを基礎にして組織を揺さぶってきた時、これに妥協すれば、もちろん一定期間、分裂はまぬがれるでしょう。しかし組織が骨抜きにされることは間違いありません。骨抜きにされることを通じて、さらに大きく右翼的に分裂させられると

考えていいでしょう。したがって原則的な対決を断固として押し進めることを、わが組合の方針にせざるをえないと考えます。

枠を突き破る創造的な闘いを！

これからも様々な理由を並べて、とくに青年部に対する非難・中傷を繰り返し行うことによって、組織の戦闘性を低めようとするでしょう。いついかなる場合も、青年労働者こそが、歴史創造の主体だからです。新たな歴史創造の主体であり、カナメであるからこそ、資本の側や、内部にあって客観的にその手先としての役割りを演ずる反動的指導者は、闘う青年労働者に対する弾圧を陰に陽にしかけてきます。これはある種の必然なのです。

右翼的な労働運動の指導者は、公然と資本や当局の意を体して闘う者への敵対活動をするのです。「組織のためだ」とかの言辞をもって、内外からの攻撃が加えられることを十分把握をしておかなければなりません。

資本、当局の側の攻撃の一つ一つに、いかに組織的に対決していくのか、その質を自らがいかに創造していくのか、これは緊急な課題となっている。既存の権威や、経験主義的指導・対処にこだわることなく、勇気をもって一切の妨害と対決しなければならない。とくに青年労働者諸君は、当局やそのイヌどもが「古くさい」と非難するマルクスやレーニンなどを解説書からではなく、それぞれの著書から学ぶことが非常に大切だと思います。

現在の敗北的な事態や労働運動の右翼的再編成、そのただ中で行われる闘争の放棄や歪曲に、正直に頭にこなくてはならない。現実の運動をあらぬ方向に、闘わざる方向に歪曲している「権威者」たちの解説書などを見ても、あまり参考にならないことは理の当然といえます。

今の労働運動、これまでの労働運動の枠内で考えるだけではなしに、反合理化、反戦、反安保闘争など、われわれ自身が闘ったいくつもの優れた

闘いの質を、自らの質として主体化し、同一性を作り出す自己自身との闘いをお互いに強化していかなければならないと思うのです。

その際に全通なり、国労などの闘う諸君との連帯を、様々な形において創り出さなければならない。われわれの担ってきた闘いを現在的に総括することを通じて、自己と組織を強化するだけではなしに、日本労働運動との関係においてもとらえ返してみる必要があるわけです。そもそも日本労働運動をどうするのかという展望を持たずに闘うなら、闘争それ自体が成功的に推進されないばかりでなく、勝利の展望が出てこないのです。

動力車の闘いは、日本労働運動の全体の動向に規定されるのであるけれど、同時にわれわれの闘いが日本労働運動を変革し、規定していくのだという実践的で弁証法的な立場をわがものにしなければなりません。

われわれの闘いは、鉄路上の上のみの、小さな闘いではないのであります。日本労働運動に大きな影響力を持つがゆえに、敵権力はわれわれの闘いを、その組織を、木っ端みじんに打ち砕こうとしてかかってきているのです。

少数になることを辞さぬ闘い

「生運研」などによる攻撃は、そうした階級的攻撃の一環をなすが故に、われわれはこれに対して、粉碎の方針と闘いを提起するのであります。単純に思想攻撃だとしてとらえるのであれば、われわれは敗北を刻印されるのです。組織攻撃に対して、柔軟な戦術を駆使するが、しかしそれは臍抜けた幅広イムズとは無縁であることをこの際明らかにしておきたいと思います。

闘う者に対する、闘う組合に対するイデオロギー的・組織的攻撃はさらに強化されるであろう。そして右翼的幹部は、その攻撃や分裂に結果的に手を貸すことになる行為を、いろいろ行うかもしれない。そして最も戦闘的であり、最も組合員の利益に忠実な者のページをも、彼らは考えるであ

りましょう。資本主義社会には、墮落した幹部がいつでもどこにでも発生する物的基礎があるわけです。

たしかに労働組合は、さしあたり改良のための闘争をやるものであるし、改良闘争を闘う団体です。「闘争至上主義」だの「階級闘争主義」だの、果ては「革命をやろうとしている」などという、過分なお褒めの言葉をイヌどもからいただいているわけですが、労働組合運動をいくら戦闘的に激しくやっても、そのことによって革命が達成されるわけではない。労働組合運動を革命運動と取り違えてはならない。

しかし、労働組合運動の戦闘的実現の全過程を通じて、われわれは資本主義社会の構造を明らかにし、最終的にそれとの対決にも挑めるような方向を、一つ一つの闘いをめぐる内容的な討論を通じて明らかにしていかなければならないと思うのです。

村上〔寛治〕先生も言われたように、少数派の運動ということを目的化してはならないし、美化してもならない。しかし多数の中にのみ自らの生きがいを見出そうとする者は、前衛でもなければ、後衛でもないということなのです。運動を進める際に主流派には反対をしないという党——これでは日本労働者階級を真に解放する正しい方針は出ません。そういう意味で、これまで培ってきたわれわれの闘いの質というものを、さらに発展させる方向をしっかりと踏まえていかなければならないと思います。

いずれにしても、少数になることをわれわれは願わない。少数になってはならないと思う。しかし少数になることを辞さぬ断固たる闘いを通じてしか、少数になることを拒否することはできない——私はそういうふうに思います。多数であることを目的として追求したならば、質的に墮落するだけではなく、量的にも今日の攻撃の中では少数に追いこまれてしまうであります。

したがって少数となることをも辞さぬ闘いを、われわれの質的な高さとして継承し、発展させる

ことを通じて、日本労働運動総体に肉薄し切り込み、あるいは帝国主義者たちに対して最も有利な、そして効果的な闘いを展開することができるであろう。そうした、少数になることを辞さぬ闘いを通じて、分裂との対決をも創り出すことができると思います。そのことはねばり強い説得と、断固たる組織統制の両者の統一的な展開として進められなければならないと思います。

分裂、脱落の一つの時期は、三月春闘、そして八月全国大会前後となるだろうと私は見ています。三月は春闘を不発に終らせる意味で、八月は闘う方針を否定する意味で…。それを先取りして、万全の準備を整えることによって日本の労働運動を牽引できる質、物質力、影響力をわれわれ自身のものにすることができるのではないのでしょうか。

総評やその傘下の各単産、単組は多くの場合、生産性本部の設置にも、生産性運動にも反対の立場を取ってきました。立場を取ってはきましたが、具体的な反対闘争、すなわち合理化反対闘争を合理化反対闘争として実現することは一貫してなされなかった。当然のことながら「生運研」による右翼的反対派づくりに対決していない。その結果的表現が今日の右翼的労働運動の現実であると言えます。

「右翼的再編反対」と言うだけでは何もしないに等しいし、結局においてそれに与^{くみ}することになることを明確にし、春闘や総評運動総体の「国民生活闘争」への歪曲に抗し、昨年の春闘の戦闘的実現、反安保闘争、およびそれへの弾圧粉碎闘争の一カ月にわたる連続的で戦闘的な闘いを教訓化し、71年の、したがって70年代の新たな運動の一層の実現のために、組織を強化し闘い抜こうではありませんか。